

【鬼が来た：鬼子来了】

舞台は、日本降伏直前からの、万里の長城に近い、華北の貧しい農村である。ここに「私」が現れ、一人の日本兵と通訳を強引に預けていく。

村は日本軍に占領されているが、それなりに安定した日常が続いている。そこに持ち込まれた異常で迷惑な存在。日本兵：花屋が教えられているのは、「生きて虜囚(りょしゅう)の辱(はずかし)めを受けず」だけで、捕虜になった時には死ぬと教えられている。だから「殺せ！殺せ！」と叫ぶ。

通訳は道連れで死にたくないからその場を嘘の通訳で取り繕う。村人も勿論、こんな時にどうするかなど経験もなければ、教育もされていない。だから、戸惑いつつ、必死で道を探る。

花屋は職業軍人ではない。普通の農民である。村人も農民。殺されるという一時の恐怖が去ると、お互いに次第に心を許し、花屋も生きる執着が湧いてくる。

しかし引き取りに来ると言った「私」は現れず、半年が過ぎる。村人の心も揺れ、始末しようと焦ったりするが、首尾よくいかず、時間だけが過ぎていく。この辺はドタバタ喜劇風で面白い。

ある時、花屋の提案で、村人はお礼を期待してこの2人を軍に返しに行く。しかし、軍は生きて戻った花屋を歓迎せず、リンチを加える。敗戦を知っていた酒塚隊長は一計を案じる。そこから始まる息もつかせぬ一連の不条理劇。

不条理劇の中心人物は隊長酒塚。彼は花屋が戻されてきたとき、実は日本が降伏したことを知らされていた。しかし降伏した軍はどう行動すればよいのか？

勿論日本の軍隊で、降伏時の対処など教育されていない。今まで「日本は必ず勝つ」から降伏時なんて想定する必要が無かった。だから今までの延長線上で、無事帰還した花屋を歓迎するどころかリンチを加え、村人を騙して一網打尽にするような画策もやる。

日本軍は降伏した後も、実は八路軍に降伏することは許されなかった。だから八路軍が圧倒的に優勢な地域でも、国民党軍が来るまでは八路軍と闘い、状況維持を行った。



映画では、その国民党軍が現れることで、誤解と悲劇は頂点に達する・・・

注1：防衛庁の研究所で、45年6月から9月までの日本降伏前後の電報を調べた事がある（大陸命、大陸指）。その時、前線に何が指示されたのか？

- ① 八路軍に降伏してはならない。国民党軍に降伏すること。
- ② 武器は国民党に渡し、それまでは八路軍から死守すること。
- ③ 国民党軍を迎えるときは、銃砲は水平より15度以上、下に傾ける・・・等々詳細に指示。
- ④ しかし、軍が守るはずの日本人居留民をどう守るのか、どう生き延びさせるのか、中国国民にどう接するか等については、一切指示が無い。元々居留民保護は侵略の口実に過ぎなかった。

（大陸命／指＝大本営陸軍命令／指示）

注2：八路軍は当初、日本兵の捕虜を捕まえると武装解除し、怪我をしている場合は治療して解放していた。しかし帰した捕虜は処刑されたり、自決を強要されたりすることが分かり、開放をやめる。延安に送られた兵士は、学習することで日本の戦争の意味を知り、日本軍に近づいて反戦を呼びかけるという危険な任務にたずさわる反戦兵士となった。

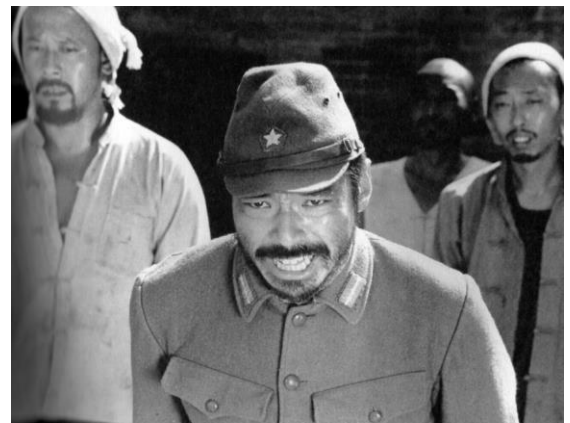


注3：敵対する相手を「和睦」と称して宴会に招き、酔ったところで全員殺してしまうのは、日本で古くから行われたお家芸である。

例えば日本書紀では、ヤマトタケルは熊襲と闘ったが勝てないので、和睦を結ぶとして宴会を開き、舞を装って近づき、隠し持った剣で刺し殺したとある。

「天皇の為なら騙し討ちをしてもかまわない」と教えている様なもの。

北海道に和人が侵入し、商圈を広げた結果、アイヌと争いになるが勝てない。アイヌは毛皮・干し魚・熊の胆等の産品を日本海貿易船と取引し、富を蓄積、銃を多数持っていたためである。そこでアイヌの酋長達を招いて和睦の宴を開き、盛り上がった時に隠れた兵が襲い、皆殺しにする。以降アイヌは弱体化した。



監督のチアン・ウェン（姜文）には日本に多くの友人がいる。皆「礼儀正しく清潔で愛すべき人々」だという。しかし一方、子供のころにお年寄りから聞かされた日本軍の所業は「鬼」そのもの。この落差は何か？ この謎を解く作業がこの映画であった。

・チアンは中国映画の描く日本兵の雑な描写に批判的で、徹底的にリアルにこだわった。日本の軍を扱った映画「戦ふ兵

隊]、「暁の脱走」・等々の他、多数のドキュメンタリー映画を見、実際に戦争に参加していた老兵士達の体験を聞いたという。軍服も日本で集め、日本兵は日本人留学生を集めて出演させた。陸軍と海軍の違いも表現されているという。

・この映画は、**尤風偉**（ユウ・フォンウェイ）の小説「生存」を原作とするが、実は原作からは、「日本兵+通訳」という人物配置の他は余り多くを使っていないそうだ。脚本を仕上げるにあたり、原作者及び、自分自身を含めて何と、4人の脚本家を使ったというこだわりである。

・チアン・ウェン（姜文）は、監督・脚本だけでなく、主演を演じている。元々彼は役者の出身であり、84年の「末代皇后」の溥儀役でデビュー、86年の「芙蓉鎮」、87年の「紅いコーリャン」が、我々中国映画ファンにとって強烈な印象を残す俳優である。

・監督デビューは、94年の「太陽の少年」で、この映画ではヴェネチア映画祭で、当時14歳のシア・ユイ（夏雨）に主演男優賞を獲らせたほか、シンガポール映画祭で作品賞、台湾の金馬奨で6冠に輝いている。ちなみに夏雨は「再見」で弟役を演じている。

・また「再見」の長男役のチアン・ウー（姜武）は姜文の実弟であり、この映画にも出演しているよし。

・この映画の音楽は「再見」の父親役・兼音楽担当のツイ・チェン（崔健）である。

・日本兵の花屋役は説明するまでもない、おなじみ、**香川照之**。中国映画でも「故郷の香り」に出演している。

・ユイアル役のチアン・ホンポー（姜鴻波）は体育大（？）出身で、バレーボー

ル選手として国際大会優勝後、俳優に転じているという異彩である。

・通訳役のユエン・ティン（袁丁）は北京の人民大学で経営学を学び、交換留学生として来日、その後NHK等、TV局他で働く。

姜文のインタビューから

・村人たちが体験する不条理なまでの価値観の変遷、その選択不可能な状況がこの映画の骨子。花屋も村人も隊長も皆、経験も役に立たない状況に置かれる。実は人間はそういう状況にいつでもおかれる可能性がある。

・隊長だけは終戦の知らせを受取っている。そこにノコノコと花屋が自害もせずに戻ってくる。そんな中で何を基準に判断すればよいのか？ 彼は実際の戦闘という意味での戦争は知らない。だから終戦の明白な意味が彼にはない。だからそれまでと同じ状況を継続するのです。

花屋が騙されて叫ぶ言葉

「大哥、大嫂、過年好！

你是我的爺、我是你的兒」

お兄さん、お姉さん、新年おめでとう！
あなたは私のお爺さん、私はあなたの息子

（福島）

